鶴岡市総合計画審議会（会議概要）

○　日　　時　　平成３０年２月１９日(月)　　午後２時３０分から
○　会　　場　　グランドエル・サン　ローズルーム
○　次　　第　　１　開会
２　あいさつ　（皆川治鶴岡市長）
３　委員の紹介
４　会長・副会長の選任
５　協議　（議長：伊藤眞知子鶴岡市総合計画審議会会長）
(1) 鶴岡市総合計画の策定について
(2) 鶴岡市の現状と課題について
(3) 鶴岡市のこれからのまちづくりで重視すべき事項について
(4) その他
６　閉会

以下、委員発言の概要

人口関連

・人口減少はここ 10 年間、20 年間の間言われ続けてきたことだが、対策に効果があったのか。掛け声はかかったが、なかなか実行されなかったというのが実態ではないか。まもなく人口が 10 万人を切るような事態を迎える中、人口減少を悪と捉えるだけではなく、居直ることを考えてもいい時代に入っていると思う。人口が減少しても幸せに皆が暮らせるような社会を作るということも、一つの選択肢ではないか。

・人口 10 万人維持ということが、果たして我々の本当の目標なのかどうかということについて、考えていかなければならない。生産年齢人口が減っていくということが、都市の活力を失っていく一番の原因ではないかと思うが、その点から考えて、10 万人というのは、やはりどうしても残しておきたい線なのかどうか。この 10 万人を維持するという目標設定についても議論が必要である。

・人口減少を避けるべき理由は、企業の労働力確保と公共インフラの維持にあると思う。労働力人口については、都市間競争である。県内外に関わらず、グローバルに人材を確保できるくらいの競争力を磨いていくことが必要で、ブランディングやマーケティングを含めてやっていく必要がある。また、現在の公共インフラを最低限維持していくためには、どの程度の税収を確保する必要があるのか、すなわち人口を何万人維持しなければならないのかが気になる。緩やかな縮小の中で、最低限の人口を維持しつつ、庄内から社会に対して価値を生む。攻めるところと守るところのような、二つの考え方があってもいいと思う。

・人口数だけではなく、人口密度、あるいは人口配置についても同時に考えなければならない。しっかりとインフラを享受できるところに住むという点で、いかにコンパクトシティを進めるかが重要

だと思う。都市計画をしっかりとして、人が住むところと住まないところをある程度意識付けしてやっていくのがいいのではないか。
・人口問題に始終するのが少し気がかりでもある。人口減少に歯止めをかける努力は惜しまないで続けつつも、大体このくらいになればこういうことはできるというような、そのようなコンパクトシティの具体像をこの先の 10 年では描いていけるような総合計画になるといい。
・人口の社会減少を止めるために、就職先や進学先が必要であるし、自然動態に対しても、出生数を増やす施策が必要である。
・人口減少が是か非かという点で、介護や福祉の分野では、人がある意味インフラであり、その減少は非常に深刻である。若者が減る中、財政的な負担という面だけではなく、直接介護や福祉に携わる人たちがいなくなってしまうという懸念があり、高齢者の増加を支え切れるかという問題がある。現状でもかなり人手不足が深刻であり、将来が非常に心配である。

若者支援
・食も自然も、歴史も産業もすべて人が支えている。若者が活躍する場、産み育てられる環境をどう作っていくかというところを真剣に考えなければならない。
・力をつけて鶴岡に戻ってきたいという若者もいる。鶴岡に戻ってきて力を発揮しようという考えが子供たちに広がるようなことができないだろうか。
・若いときに市外に出るのは仕方がなく、それは健全なことである。20 歳代から 50 歳代にかけて少し転入超過の状態になっている状態がいいのではないか。

高齢者支援
・高齢化が進む中、買い物困難者の増加が懸念される。人にやさしいまちを作るということは、高齢化社会においても住みやすいまちを作ることでもあり、それを見ていく若い世代にも選ばれるまちにすることで、人口減少にも少しずつ歯止めがかかっていくのではないか。地域が人を育てると思うので、まずは高齢化社会の中で住みやすいまちを目指し、また若年層がそれを支え、自分たちもその世代になったときに、安心して暮らしていけると思えるようなまちづくりをしていくべきである。
・高齢者が安心して住み続けられるまちにしていくための公共サービスを充実させていく必要がある。また高齢者の方々に喜んで貰えるような観光をやっていく必要がある。

地域振興
・合併後、旧町村部の個性が育っていない。自由に地域が使える財源も必要。鶴岡市全部が一つの方法ではなくて、各地域の個性を出すということも提案したい。
・旧町村部同士で切磋琢磨できるような仕組みづくりを考えてもよいのではないか。

厚生分野
・今までの福祉の枠組みは限界を迎えている。今は「子供」「障がい者」といった属性別、縦割り

となっており、行政機構もそうなっているが、そうした形では対応できない複合的な事例、課題がある。行政機構を含めて相当大きな対応をしていく必要がある。専門性だけを求めると生活全体を見渡すことができなくなる懸念もあり、福祉・介護・医療はそうした視点も総合計画に盛り込んでいく必要がある。

産業分野

・農業をいい状態で次の世代に渡していきたい。今までどおり家族経営でやっていくのが難しくなってきている現状にあるが、やり方を考えながら守っていく方法を考えていきたい。
・農業をやりたいと思っている人はたくさんいるが、自分の土地をなかなか得ることができないという問題もある。そういったことも検討しなければならない。
・人口が減少する中では、交流人口の拡大、観光で訪れる人を増やすことで、移住の促進にもつながるのではないか。鶴岡の魅力を構築していく上では、歴史が重要。例えばお城など、タクト鶴岡やKIDS DOME SORAI、SUIDEN TERRASSEに負けず劣らずのシンボルを市街地に整備することも必要。
・所得のランキングが低いところは人口も減っている。経済力を高めるためには、起業者を増やすことだ。経営革新や技術革新は、夢や希望を繋いでいく作業ではないかと思う。行政でもそうした雰囲気を醸し出すことはできるのではないか。
・有効求人倍率は２倍を超えており、若い人は地元に来なくなっている。海外から呼び込むなど、あの手この手で呼んでくることが必要。

社会基盤分野

・公共インフラ整備についても、耐用年数や維持管理費の捉え方など、基本的な考え方をきちんと計画に盛り込むことで、インフラ整備の指針となるのではないか。
・公共サービスの面では、車に頼らない市内の移動手段が必要。路線バスの充実や、ハブ機能の設置や強化が必要である。観光客が夜間に飲食街に行くにも足がないのが現状だ。市が運営してもいいわけで、そうした公共的なものに採算性を求めなくてもよいのではないか。鶴岡には美味しいものや、すごい風景があるわけで、それを活かして外からお金を取るということをやる、そうしたことに寄与するサービスをやっていくということが大切ではないか。
・何かを実現していかなければならない。まず観光地を巡るものでもよいから、市内を回るバスなどは、実現できるのではないか。鶴岡市では何か面白いことをやっている、あのバスに乗るとすごいところに連れて行ってもらえるというものがあれば、夢があるのではないか。

鶴岡の価値、10年間で伸ばすべき点

・公益、自然、文化の３つはまちづくりをする上で非常に重要であり、市民の暮らしの満足度への貢献や、この場所に人を集めてくる方法にもつながる。そもそも庄内のすべて人の根底に、公益に資するという哲学があると感じるし、社会に価値を生む上で非常に大事な考え方だと思う。自然というところでは、一次産業でどれだけ若い人を集めるか。やりたい人は多くいる。きちんと情報をリンクさせ、マッチングさせていく必要がある。

・食についてはユネスコにも登録されているということもあるし、鶴岡が何を売りにしたらいいかということを考えていく必要がある。
・食の豊かさは大きいと思う。食育という面で子育てとも繋がるし、農業や観光とも関わる。食に付加価値をつけていくことで利益も生み出す。どんな形であっても皆に繋がっていくものではないか。
・鶴岡人としての幸せとは何かということを、方向性を持って議論できるかということもポイントではないか。
・都会と同じ生活を追い求めている傾向があるように思える。都会に比べて所得水準が低い中で、子育ての経済的負担なども、相対的に大きいのではないか。大企業を志向して県外に就職しても、結果的にリスクを背負う形になっているのではないか。皆が心の豊かさや懐の豊かさを追い求めるようなことを学べないものか。農業や先端産業が存在し、高等教育研究機関も充実するなど、恵まれた地域であるのだから、どのような生き方ができるのか、子供も大人も勉強していきたいものだ。
・自分が先々価値を生む環境があること、自己実現ができる場所というのが、若い人たちが移住を決める上で大事なポイントであり、山形の庄内という場所が、ぜひ若い人たちにとってチャレンジする場所、自己実現をする場所であってもらいたい。ぜひこの 10 年間の総合計画が、市民の方もそうだが、ここに戻りたい、来たいという方々が、価値を生もうというふうに思える内容になってもらえるといいと思う。
・2020 年の東京オリンピック・パラリンピックでは、鶴岡を訪れたいという外国人も多いだろうから、それに対応し上手く利用していかなければならない。また 2025 年には団塊の世代が後期高齢者となるという大きな人口イベントもあり、そうしたことを見据えてこの 10 年間で何をやったらいいのか、本当の幸せとは何かということを突き詰めて考える必要がある。農業や社会インフラの整備などもその一つである。本当に幸せに直結するのかどうかを見定めるということを常に頭に置きながら計画を作っていければいい。

計画の策定・推進

・過去 10 年間の施策について、何が足りなくて、何が十分だったのか、検討することが必要である。
・現状の課題だけではなく、誇るべきところも整理していく必要がある。
・まず目標数値というものが必要なのではないか。その目標数値に対して、それを導き出す具体的な政策というものがなければならない。
・市政運営も企業経営も同じではないかだろうか。企業として人を集め、利益を生み出すためには、より多くの人に夢を見せることが必要。最小限の投資で最大の効果を得なければならないし、技術革新を繰り返し、理想の最適化を図っていかなければならない。
・前回の総合計画の策定後は、分厚い冊子を作り、その後に市民向けの要約版を作っていたが、まず市民に読んでもらえるような冊子作って、そこから詳細なものを作って具体的な施策に移すというような、発想の転換をしてもいいのではないか。
・「鶴岡市はこういうことをやっている」、「こういうふうにやっていきたいが、どう思うか」というようなことをもっと発信して、市民に吸い取ってもらえるといいのではないか。

・食文化や日本遺産にしても、市民が具体的に感じ取って、活性化していくことが重要だが、計画が市民まで伝わっていないのではないか。
・目指す都市像としてキャッチフレーズ的なものを考えるにしても、この先 10 年間は何に重点を置くのか、何か合意できるものがあるか。例えば、「食」をキーワードにおいて、新しい産業振興や、ツーリズムなどを具体的に推進し、展開するような 10 年にするんだというようなことが分かるようなキャッチフレーズにできるかどうかもポイントではないか。
・何のためのアウトプットを作るのかというと、これから先 10 年間、この方向でやるのだという気持ちが奮い立つ、皆がわくわくするようなものを作らなくては意味がない。